博士論文概要

・タイトル：物語談話における文法と談話構造

・氏名：奥川育子

本論文の目的は自然な日本語の物語談話（Narrative）とはどのようなものなのかを明らかにすること、また、日本語学習者の誤用・中間言語分析を通じて、日本語上級者であっても習得が難しい「一つの構造体としてのまとまりを構成する」談話展開技術がどのようなものか明らかにすることである。

そのため、日本語母語話者と学習者に言葉のないアニメーションのストーリーを書いてもらった物語談話を認知機能言語学の観点から分析し、それぞれの談話における談話展開をつかさどる文法と談話構造がどのようなものなのかを示している。

本論文は序章と、それに続く 6 章からなる本論、および終章の結論という計 8 つの章から成り立っている。

序章では、本研究の背景を説明してから、研究目的および研究の方法について述べている。

第 1 章　物語談話とは何かでは、研究の分析データの性質を明らかにするために、まず談話とは何か定義し、その後、談話分析とはどのようなものか先行研究を概観しながら示している。また、話し言葉と書き言葉の違いについて明らかにした後、本研究が書き言葉を分析対象とする理由を述べている。さらに、本研究の対象とする物語の談話分析の先行研究を取り上げた後、本研究の拠り所とする認知機能主義言語学とはどのようなものか明らかにしている。

第 2 章　分析のデザインでは、本研究の調査概要とデータの分析方法を示している。本研究の調査協力者は全員、大学・大学院に所属する 10～30 代の学生である。学習者のレベル分けには、筑波大学留学生センターで開発された SPOT（Simple Performance-Oriented Test）を使用し、中級と上級にレベル分けしている。約 5 分の言葉のないアニメーションを使用し、そのストーリーを調査協力者に書いてもらったものを調査資料として使用している。

第 3 章　指示表現と助詞ハとガの選択では、談話展開と密接にかかわっている談話における指示表現の選択、助詞ハ・ガの使用状況、主題の導入・展開の仕方を考察し、日本語らしい物語談話とはどのようなものなのか、また日本語学習者の談話の主題展開の習得状況を明らかにした。日本語母語話者と中級、上級学習者の物語談話における指示表現の使用の違いを三種類の文脈（current, known, new context）でのマーキングに着目し、分析を行った。また、以下の研

究課題を立て、談話分析を通して課題の解明をしてきた。

・研究課題：「三種類の文脈（current, known, new context）の中で日本語学習者と母語話者は指示表現をどのようにマーキング（ＮＰは、ＮＰが、省略）しているか」

その結果、current context の指示表現のマーキングを見てみると、日本語母語話者はほとんどの場合「省略」と「ＮＰは」しか使用していなかった。しかし、学習者は中・上級共にこの文脈での「ＮＰが」を使用しており、省略の使用率も高かった。学習者の談話では、登場人物を談話に導入したら、それ以降の文でその登場人物を連続して省略する傾向が見られ、書き言葉での過剰な主語の省略を行っていることがわかった。

Known context では、学習者は談話で既に紹介されている登場人物にも「が」を過剰に使っていた（学習者の「ＮＰが」の過剰使用）。

New context での指示表現のマーキングでは、日本語母語話者の「ＮＰが」の使用が多かった。日本語母語話者は登場人物を始めて談話に導入するとき、ほとんどの場合、その指示対象をガでマークしているが、学習者は中級・上級共に「ＮＰは」を使用する傾向にあり、ハとガの使い分けができていないことが明らかになった。

第 4 章　視点では、物語談話の新登場（人）物登場場面における視点の移動の考察を行った結果、次の点が明らかになった。

日本語母語話者は新登場（人）物を談話に導入するとき、その（人）物に一時的に注目が集まるように、新登場（人）物をガでマークし、注視点をそこに移動する。ガによって現象描写をすることで一時的に予想外の出来事に焦点をあてている。しかし、視座は談話全体を通して、一貫して主人公に置いており、物語の談話展開がスムーズに展開し、わかりやすい文章になっている。

一方、日本語学習者は母語（中国語、英語）にかかわらず、上級レベルになっても注視点の新登場（人）物への移動と主人公（ピングー）への視座の固定をおこっているものはほとんどおらず、視座の主人公への固定は上級レベルにとっても習得が難しいことが判明した。中級においては、視座を判定する手がかりを使用しないものが多いということがわかった。

これらの結果より、日本語母語話者の物語談話の特徴である「注視点の登場（人）物への移動」と「視座の主人公への固定」は上級学習者にとっても習得が難しいものであり、この注視点と視座に関する学習者と母語話者との差が、学習者の談話の不自然さの要因の一つになっていると考えられる。

さらに、日本語母語話者（「主観的事態把握」）と学習者の事態把握（「客観的事態把握」）の違いが物語談話の中に顕著に表れていることも明らかになった。

第 5 章　連体修飾節（以下、連体節）では、日本語の物語談話にあらわれる連体節の類型と機能について考察を行った結果、物語談話には、以下の大きく二種類の連体節があることが明らかになった。

①談話展開型連体節：主人公や主要人物を主名詞にとり、主節に対する情報付加を行いながら時系列にことを連ね、談話をスムーズに展開する機能がある。

②情報付加型連体節：あまり重要でない人物の談話への導入に使用されることが多い。この連体節は主名詞に対する情報付加を行っているが、その情報は背景的なものであり、導入された人物は持続性が低く、その後、語り継がれることはない。

また、談話展開型連体節は上級学習者にとっても使用が難しいことが明らかになった。談話展開型連体節は必ずしも使用しないと意味が通じないものではないが、使用することで接続詞の省略が可能になり、先行文脈を効果的にまとめあげ、談話展開を行うという機能がある。

一方、日本語の物語談話における情報付加型連体節は、中級学習者においても使用が多くみられ、その使用方法も日本語母語話者のものと類似していることから、談話展開型連体節に比べて、習得がしやすい連体節ではないかと推測される。

さらに、英語の物語談話における関係節では、登場人物の情報付加（主名詞：持続性の高い人物と持続性の低い人物の両方。時間差なし）と追叙用法（主名詞：持続性の低い人物、または前文脈全体を指す。時間差あり。関係節内で主節の結果を表し、談話をまとめ上げる）の大きく二つの関係節が考察された。

第 6 章　時制転換では、Tomlin（1985）、Hopper and Thompson（1982）等の先行研究から「日本語の物語作文においても英語の物語作文においても、前景情報である出来事に過去形が使用されるのが無標である」という仮説を立て、物語の談話構造、前景・背景の面から日・英両言語の物語作文における時制の選択形式を考察した。

その結果、日本語の物語作文では、設定・方向付けなどの背景的事象で非過去形が使用され、出来事などの前景的事象で過去形が使用されるのが無標であることが明らかとなった。

一方、英語の物語作文では、日本語のように時制転換が頻繁に行われないのが無標で、本調査では、出来事などの前景的事象でも非過去形で語られていた。この点は過去の出来事を物語るという点で本研究の物語談話と共通する、小説とも違う点であり、今後さらに検討していく必要がある。

最後に本研究結果の日本語教育への応用として、教材開発や日本語教授法への応用の可能性を探った。本研究の調査結果より、日本語母語話者と学習者の物語談話における注視点の移動と視座の固定の差が明らかになり、その背後には、

日本語母語話者は「主観的事態把握」を、中国語母語話者と英語母語話者は「客観的事態把握」を好むという動機づけがあることがわかった。学習者の談話をより日本語らしい自然なものに近づけるためには、学習者に「主観的事態把握」を意識させる必要がある。この事態把握の違いを教育に応用した絵カードやビデオによって学習者に意識させるのも一つの方法である。本研究の調査結果により、Slobin（1996）の言う「発話のための思考（thinking for speaking）」に言語間で相違が見られることが示された。本研究の結果を応用し、物語談話における談話構造を意識したタスクや談話展開に寄与する文法の導入、練習問題等の作成が考えられることから、本研究の結果は、言語研究と言語教育の活性化にも寄与できるであろう。